東京RC、大阪RCを創立に導いた、日本人初のロータリアン。大戦や大震災などの歴史的大事件にも、類稀なる慧眼と人類愛で利他即自利を実行し、多くの人々を助けた。

第2580地区
福島 喜三次（東京RC）
Fukushima Kisaji

1881年生　1946年没
1920/1932入会　［投資業］

日本人初のロータリアン

福島喜三次氏は、1881年、父喜平、母タツの六男として、佐賀県有田町に生まれた。実家は代々紺屋を生業としていた。2歳の時に父が死去し、以後喜三次氏は厳格な母親のもとで育てられることとなる。

長崎商業学校を首席で通し、東京高等商業学校（現：一橋大学）へ進学。当時、中央の名門校への進学は稀有であり、福島氏は一躍羨望の的となり長崎商業の評判も高まって、入学者が増加したという。

福島氏は東京高等商業学校でも首席を通し、1904年、卒業と同時に三井物産に入社。門司支店詰を経て、1905年5月にニューヨークへ転勤。以後オクラホマ、ヒューストンと移動し、1912年にダラスに赴任して三井物産が棉花貿易のため設立した現地法人サザンプロダクツ社の責任者となった。

この頃、福島氏の部下にウイリアムというドイツ人がいた。ウイリアムはダラスRCの会員だったが、第一次世界大戦の影響で帰国。後を継ぐ形で福島氏がダラスRCに入会し、日本人初のロータリアンになった。1915～16年頃のことである。福島氏はダラスRCをとても気に入り、妻に「男ばかりで非常に愉快。肩を組んで仲良く、人種差別もなく、大変気持ちが良いクラブだ」と評したという。

ベルリンでの囲碁対局中の福島氏（右）

日本にロータリーを持ち込み、東京RC、大阪RCを設立に導く

三井物産東京支店に異動となり、1920年1月に帰国。その際、RIよりダラスRCを通して「日本に持ち帰ってはどうか」と打診があった。福島氏は承知し、アルバート・アダムス国際連合会会長より特別代表の委嘱を受けてRC創立に動き出すも、三井物産の一社員に過ぎず年齢も38歳と若い福島氏には困難も多かった。そこで、以前ダラスで親交を持った三井銀行の重役米山梅吉氏にその責を委任することとし、本人に依頼。快諾を得ると、RIの了承も条件付きながら取り付けた。

1920年9月1日の設立準備会を経て同年10月20日に銀行倶楽部で創立総会を行い、日本初のRC=東京RCが誕生。米山梅吉氏が会長に就任した。

一方福島氏は幹事に選任されたものの翌1921年3月には大阪支店転勤となり、2回例会に出席しただけで退会を余儀なくされた。

大阪に移った福島氏は、加島銀行専務の星野行則氏と邂逅した際に大阪にRCを作る必要性について話し合い、それがきっかけとなって1922年11月、大阪RCが創立された。会長は星野氏。福島氏は幹事を担い、以後1926年8月に上海支店へ転任するまでクラブ運営を補佐し、ロータリー活動を楽しんだ。

さらに、赴任先の上海でも上海RC会員となり、帰国後の1932年10月には日本初のパストサービス会員として東京RCに参加、後に副会長を務めた。

人類愛に満ちた人間性とビジネスマンとしての輝き

福島氏はその生涯において度々転勤をした。そして、トップクラスの綿花の取扱高を誇っていたダラスでは慧眼と商魂で第一次世界大戦の影響を最小限に抑え、大阪では関東大震災に際して救援活動の総指揮を執り食糧をはじめとする救援物資の海上輸送をいち早く成功させるなど、行く先々で歴史的大事件に遭遇しては、真価を発揮した。とりわけ上海赴任中には、満州事変以降排日運動が激化するなか、市参事会の会員として居留民保護のため奔走し、1932年1月に上海事変が勃発して四面楚歌になっても、邦人居留民はじめ外国居留民、現地の一般市民など、敵味方の区別なくその救援に懸命に尽力した。純真な人類愛に基づく命がけの行動であったが、中国側からは疎まれ、その首に三千両の懸賞金がかかっていたと言われる。

幸いにも首を取られることなく、1932年4月28日付で本店参事の辞令を受け、帰国。1934年からは三井合名会社に移り活躍した。

福島氏は上手でも如才ない人でもなかったが、人の心を動かす誠実な人であった。例え商売敵でも、困って頼みに来れば心から同情し、何とかして助けた。常に利他即自利の商売の極意を無意識に実行し、無口で厳格な人柄ながらどこへ行っても愛され信望を集めた生粋のロータリアンであった。

文責：ロータリー日本100年史編纂委員会